

「啓示12章の「女」が「子」を産むとはどういう事ですか」

まず「女」はどこにいるのかを考慮しましょう。

「太陽で身を装った女で、月がその足の下にあり、頭には十二の星の冠がある」と表現されているので天的な存在だと考えがちですが、他の記述からそれはあり得ないと言えます。

その理由ですが、サタンは、この「女」が産もうとする「子」を食い尽くそうと構えますが、「子」は生まれるとすぐ「神のみ座」に挙げられます。

そのためにサタンはそれを断念します。

「女」が天にいるなら「子」も天で産まれるので、わざわざ上げられる必要はありません。

また、子が天に上げられたので、サタンは手が出せなくなる訳で、「女」が天的なものなら、迫害しようもなく、女も「荒野に」逃げる必要もなく、とりわけ、元々天にいるのに、「鷲の翼を与えて、荒野に逃げて」サタンの顔から逃れて養われるというのは、あり得ない話です。

ですから、「女」は地に存在しているものです。

そして当然「子」も地で産まれて、天に上げられます。

ではこの地的な「女」とは何でしょうか。

創世記 37:9 の記述に、ヨセフが自分の見た夢を語っているところがあります。

「太陽と月と十一の星がわたしに身をかがめていたのです」

するとヤコブは、「彼を叱って言った、「お前の見たこの夢はどういうことなのか。わたしが、そしてお前の母や兄弟たちがきつとやって来て、お前に対して地に身をかがめると言うのか」と述べています。

このことから、「太陽」はヤコブ（イスラエル）、「月」はラケル、（子たちの母）、「12の星」は12人の子供たち（12部族の祖）であることが分かります。

従って、啓示12：1の「太陽で身を装った女で、月がその足の下にあり、頭には十二の星の冠がある」と表現は生来のイスラエルがアブラハムの胤を産み出すということを示していると考えられます。

すなわち「女」とはパウロがガラテア4：26で述べた「上なるエルサレムは自由であって、それがわたしたちの母です。」と同一のものでしょう。

そしてそれは終末期の「地上のエルサレム」を表しています。

（詳しくは、資料「9 「14万4,000人」を改めて検証する」の末尾にある「上なるエルサレムとは何ですか」をご覧ください）



では次に産まれた「子」は誰でしょうか。

啓示 12:9 以降の記述で、サタンが地に投げ落とされたあと、「今や、救いと力とわたしたちの神の王国とそのキリストの権威とが実現した！わたしたちの兄弟を訴える者、日夜彼らをわたしたちの神の前で訴える者は投げ落とされたからである。そして彼らは、子羊の血のゆえに、また自分たちの証しの言葉のゆえに彼を征服し、死に面してさえ自分の魂を愛さなかった。」と記されています。

この記述は、この時点で「神の王国とそのキリストの権威とが実現した」と宣言できる根拠を提出しています。

それは「兄弟を訴える者が投げ落とされた[から]である」としています。

つまり、日夜クリスチャンを訴えるものが[投げ落とされたゆえ]に 王国とキリストの権威が「実現」したといわれています。

どうして訴える者が投げ落とされただけで、それが「実現したと」言い得るのでしょうか。単なる力関係だけで、ミカエルが宣戦布告をして戦ったら歴史のいつの時点でも、「サタンと悪霊を」投げ落とせたでしょう。ではなぜ、このタイミングだったのでしょうか。

「彼ら（サタンに訴えられていたもの）は、子羊の血のゆえに、また自分たちの証しの言葉のゆえに彼（サタン）を征服し、死に面してさえ自分の魂を愛さなかった」

それらの生き証人、つまり「女の産んだ男子」が「天に挙げられた」ゆえに、天において、サタンを非とし、排除する司法上の根拠が天の法廷に提出されたということでしょう。

その結果「人間を支配する王」としての正当性が確立した。」それが「今や、救いと力と

わたしたちの神の王国とそのキリストの権威とが実現した！」と言える理由でしょう。

これらのことから「女」が「子を産んだ」とは、地上のエルサレム（イスラエル）から、（死に面してさえ自分の魂を愛さなかった）殉教者が天に復活したことを表していると言えるでしょう。

「子」は「あらゆる国民を鉄の杖で牧する者」と表現されています。このことは「テアテラ会衆」のクリスチャンたちに約束されていることと同様です。

（啓示 2:26 - 27）「征服する者、わたしの行ないを終わりまで守り通す者には、わたしは諸国民に対する権威を与え、その者は鉄の杖で民を牧」する

